

---

# 終末のアポロギア

乃上スナイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

終末のアポロギア

### 【Nコード】

N9372V

### 【作者名】

乃上スナイ

### 【あらすじ】

圏点（傍点）及びルビを多用していますので、Internet Explorerでの閲覧をお勧めします。十六年前の震災から復興した日本海沿岸のと或る町に住む高校生、愛沢澄美香は、或る日人々の前で不可解な言動を取る少年と出会う。その後町では奇妙な群発地震が発生し始め、澄美香はその原因と少年との間に何かつながりがあるのではないかと考え始めるのだが……。第六回BOX-Air新人賞落選作（「BOX-Air 05号」にて同タイトルで講評が掲載されています）。本作は架空の大震災・大津

波の被災地を舞台に取っています。実際に何らかの災害の被害に遭われた方や関係者の方の中には、或いは作中での災害の取り扱いに不快感を覚える方がおられるかもしれません。お読みになる前に以上の点をどうかご確認お願い申し上げます。

## 第1話 「イエローガーデン（前編）」（前書き）

本作は架空の大震災・大津波の被災地を舞台に取っています。

実際に何らかの災害の被害に遭われた方や関係者の方の中には、或いは作中での災害の取り扱いに不快感を覚える方がおられるかもしれません。

お読みになる前に以上の点をどうかご確認お願い申し上げます。

## 第1話 「イエローガーデン（前編）」

その町は子供心にも確かに不思議だと思われるような場所だった。辺りを見回せば嫌に黄色い花ばかりが目についたし、家はみな丘陵地帯の斜面にへばりつくように立ち並んでいて、そこから眺める足元の地平にはあたかも広大な風いだ水面を思わせるような一面のガラス板が敷き詰められていた。

だからそう……、空の青さと白い雲の影。それはただ横にばかりではなく、上下にも同様にパノラマ的な広がりを見せていて、初めてそれを目にした時まるで遙か上空へと身一つで放り出されでもしたかのような錯覚に私は囚われたのである。

けれどそんな風な新鮮な驚きに満ち溢れていたかつての異国も今や日々を彩る背景へとすっかりと慣れ親しんでいて、春は菜の花、夏は向日葵、至る所でそれらシンボルフラワーの咲き匂うこの町は、私にとってもう紛れもないホームタウンと相成っていたのであった。

「おかーさん！　ねえ、おかーさん！」  
洗面所からキッチンへと行きすがら、非難がましい声で母を呼ぶ。  
「髪留め、知らない？」

昨日の夜には確かにあったはずのものがしかし忽然と姿を消してしまっていた。なのでその所在を一番知っていそうな相手に尋ねるのだが、「何？　また無くしたの？」

「無くしてないって、無くなったの」  
「だから無くしたんでしょ？」

「だーかーらー」今一意思の疎通が上手く行かない。けれど今は緊急事態である。

「もういいや」私はふて腐れた声を上げつつも、取り敢えずはそう

いうことにしておこうと方針を転換することにした。

「昨日洗面所に置いておいたんだってば……私の髪留め。見なかった？」

「髪留めってあれでしょ？ ピンクのやつ」

「青いやつだつてば！」今年の正月に隣町で買ってきたものである。それまで使っていたピンクのものが急に子供染みているように思えて衝動的に買い換えたのだったのだけれど……、「もうそれでいいや」差し迫った状況の前では妥協も已むなしである。私はくるりと体を翻して部屋へと取って返すことにした。

「だからいつもその辺に放っておかないでって言ってるのに……」

ため息交じりの母の声を背中に受けつつ廊下を逆戻り。私は二階の自分の部屋からハート型のピンクの髪留めを取って来ると、洗面所へと飛び込みいつもの場所へとそれを留めた。こうしておかないと生来天然パーマの気がある私の前髪は言うことを聞いてくれないのである。今はまだ湿気の少ない時期で助かっているけれど、あと数ヶ月もすれば地獄の梅雨の季節がやって来る。そうなれば朝の間は今の比でなくなることは火を見るよりも明らかだった。

再び廊下をキッチンの方へと向かい、今度は途中で折れて部屋の中に入る。と、ダイニングでは無人の食卓の傍でテレビがひとり言を呟き続けていた。

「あれ、おばあちゃんは？」いつもならそこでじっとテレビのニュースに耳を傾けているはずの人物がいない。なのでキッチンに向かつて尋ねると、「ああ、何だか早くから出掛けちゃって……、ちょっと慰霊碑まで行って来るとかって」

「慰霊碑？」思わず聞き返さざるを得なかった。だってその「慰霊碑」が私の知っている「慰霊碑」と同じものであるとするならば、ちよつとした散歩のつもりで向かえるような距離ではないはずである。故に眉を顰めて訝しむより他なかったのだけれど……、「ああ」そうかと、私はいつもの自分の席へと腰を下ろしつつ納得していた。目の前のテレビがちょうどそのことについて触れている。

「ほら、今日は……」

「うん」キッチンからやってきた母からポテトサラダを受け取りつつ頷く。

そうなのである。今日は一年の中で最もこの町が厳肅な雰囲気になる日。つまりはそう、『十六年目の震災記念日です』

テレビのアナウンサーがゆつくりと、噛み締めるように言った。

「でもあとでまた行くんでしょ？」

「あんたもよ？」

「分かってるよ」それはもう例年のことであつた。今更言われなくてもそのつもりだったのだが、トーストに齧り付きながら答えるとしつこく念押しの声が掛かった。

「学校が終わる頃に迎えに行くから、ちゃんと校門の前で待っててね？」

「はいはい」お座なりの返答を返しつつも食事のペースを上げる。

そろそろタイムリミットが近い。私はテレビのニュースが次の話題へと移る前にどうにか朝食を平らげると、席を蹴立てて立ち上がり、「ごちそーさま！」玄関へと向かう途次、廊下に置いておいた鞆をピックアップする。

「ああ、それとね」

「え？ 何？」靴を履きながらキッチンからの声に応える。何かあるなら一度に言つて欲しいものであるが、なお悪いことにそれはひどく今更な用件であつた。

「十六歳……、誕生日おめでとう」

思わず眉根に皺が寄る。とは言え今は時間がないので言いたいことは胸に秘めつつ小さくため息。そしてその憤りをバネに立ち上がると、「行ってきます！」

目の前のドアを開いてその向こう　あの日見た一面のパノラマが待つであろう世界へと向けて力いっぱい駆け出していたのだ。た。

沿岸の広大な平原地帯を埋めるその目映ゆいばかりの人工の青海原　ソーラーパネルの群れを眼下に臨む我が家からすぐ目と鼻の先。通い慣れたバス停には折も折、これ以上ないというタイミングで駅へと向かうバスがすべり込んでくる場所だった。

私はいつも通りに平野側の席を確保すると、体を深く背もたれへと押しやり乱れた息を整える。と、時を置かず動き出した車両の重力に促されるようにして、私の視線は自然と窓の外へと向いていた。

その先にある何とも壮大な眺めはいつも通りである。

あたかも青い海原のように、一面深い碧瑠璃を湛えているそれらソーラーパネルの群は、今から十年程前に設置が開始されたもので、その数年後にはすでに今のような姿で完成されていた。そのことはまだ幼い時分に祖母の家へと遊びにやって来ていた私の記憶にも強烈に残されている。

けれども初めて見た時には思わず全身の震えが止まらなかったような光景もかし、今となってはすでにもう数年来の、という但し書きが付く、何とも馴染み深いものと成り果てて久しかった。

私たち一家がこの町へと越してきてからもうかれこれ五年になる。当時小学生だった私も今や地元の国立高校へと入学して一年近い。この春でもう二年生になる予定なのであった。

最近では学校まで向かう道のりとして手慣れたもので、始めの内は何かと面倒に感じられていたバスと電車を乗り継いでの通学もそれ程苦痛とも思わない。

万事が平凡、万事が平穩、そんな毎日であった。

「おはよー。<sup>すみか</sup>澄美香」



割と始業時間限り限りに教室までたどり着くと、ナコこと新井日名子なこが前の席から体をこちらへと擦じ向けていた。

「おはよ」それに応えつつ自分の席に腰を下ろす。と、「どうしたの？」

「え？」何やら気にかかることがあったらしい。何事かを尋ね掛けてくるのだが、生憎自分では自覚がなかった。短い返答に聞き返す。「いや、なんかいつもよりテンション低くない？」

「ああ……、うん」そこでようやく無意識にため息を吐いている自分に気づいた。

「うちのおばあちゃんがさ、なんか朝からいなくて」

「おばあちゃん？」

「うん」ナコは中学からの友人である。うちにも何度か遊びに来ているのももちろん祖母とも面識があった。「なんか慰霊碑の方まで行ったらしくって」

「慰霊碑って……、ああ」そっか、と何やら納得するものがあつたらしい。「今日だもんね。記念日」

「うん、でも去年はこんなことなかったのに……、なんでだろう」今から丁度一年前、震災十五周年を記念する慰霊式典は例年のそれよりも大分規模の大きなものとなっていた。とはいえ私にとってはそのことである。心構えの上ではさしたる違いはなかったし、それはおばあちゃんも同じであるように見受けられていた。なのにどうして今年に限ってなのだろう。

そんなことを何とはなしに考えていると、それは余り意外でもないといわんばかりの合いの手が入った。

「まあなんか色々言われてるもんね。最近」

「え？ 何が？」けれど私にとっては意外も意外である。

「何がって……、ほら、三週間くらい前だっけ？ 南米の方で地震あつたじゃん」

「え？」

「何？ 知らなかったの？」

「あ……、いや。確かになんかテレビでやってたかも。ちょっとだけ」

今朝のテレビのニュースを思い出してみる。確かにそれらしいことを少しだけ言っていたような気もした。

「それがさ、十六年前とおんなじような感じだからって……」

「おんなじ？」

「連想させるってこと。時期的にさ。海外で大きな地震があつてそれが波及してくるみたいないなタイミングで起こったんだって、十六年前の地震。だからなんていうか……」

そう、と、何やらじつくりと考えた末の言葉としてはそれはひどくシンプルな、けれどそれでいて無性に胸をざわめかせるものであった。

「不安……、なんじゃないのかな」

ナコの話はなんだか分かるような、けれどもよく分からないような、何とも言い難い物言いのように私には思えた。

だってそれはもう十六年も昔の話である。

奇しくも私の誕生日と同じ日に起こったその未曾有の大災害は、けれども今となつてはその被害の痕跡を探すことすら困難な代物なのである。

もし仮に今また同じような災害が起こったとしても、その被害は決して十六年前のそれを踏襲しない。その為にこそこの町は過去の教訓を踏まえて世界に類を見ない堅固な防災性をこの十数年間で着実に会得してきたのである。

なのに一体祖母は何を根拠に不安を感じているというのだろうか。それはもちろんナコ本人にも確証などない、何とはなしの推測に過ぎなかっただろう。けれど私ともう同じである。そんなふうな嫌に信憑性のありそうな話を聞かされてしまったが最後、事実がど

うあれもしかしたらという疑念は中々頭から離れてはくれずにいて、結局それはその日最後の授業が始まるまで延々私の心を悩ませてやまなかったのである。

六時間目の授業開始早々、例のあの徐々に音階を上がってゆく特徴的なチャイムがスピーカーから流れたあとで、誰かは分からないけれど教師の声で告げるアナウンスが流れてきた。

『全校生徒のみなさんにお知らせします』

けれどそれはもちろん朝の内に担任から聞き及んでいたことである。なお且つ言えば昔からこの辺りに住んでいる私たちにとっては今更事改めての説明も必要のないものであった。

故に教壇から降りつつ放送に集中するよう促す数学教師の言葉など待つまでもなく自然と手は止まり、顔は机の上へと俯けられていて、クラス全員がもちろんそうだった。一分間の黙祷を求めるアナウンスが流れる頃にはすでもう意識は深く目蓋の裏へと溶けていた。その中で、なぜだろう。ふと思いついたのである。もしかしたら彼女、祖母に取って十六年前の震災はまだ終わっていないのかもしれない、と。

「あー、終わった終わった」

どうせそこまで熱心に授業など聞いてはいなかっただろうに、昇降口へと廊下を行きつつナコが盛大に伸びをする。「これで今週はあと一日。でもってあと二週間もすれば」

「春休み？」

「の前にテスト返却と卒業式があるけどね」と、言葉を継いだ私の声に更なる補足を付け加えたのはもちろんナコではない。もう一人の我らが友人、宮藤七海ふじみや ななみであった。

「って水差さないでよ」

「別に水差したつもりはないけど」

「差してる差してる」

いつでもどこか一歩引いた位置から私たちのことを見ている彼女は、一見クールな性格のようにも見えるのだけれど、実際はただのマイペース。どちらかと言えば天然の気のある少女だった。ただ単に面倒くさくないからという理由だけでそうされているような、飾り気なくセンターから左右に梳き流されたロングのストレートを靡かせつつ言う。

「で？　今日はこれからどうするの？」

「どうするって？」

透かさず反問するナコに、応えつつもしかし、視線だけはこちらに向いていた。

「だってほら……、ねえ」と、一体何だろう。何か私に関係があることなのだろうか。

今ひとつ分からずにぼんやりしていると、「別に大層なプレゼントとか用意してるわけじゃないけどさ。ケーキ奢るくらいは普通に考えてたんだけど」

「あ……」そつかと、そこでようやく気がついた。

これまでは例年そうだったので忘れていたが、今年からは今までようにはいかない。彼女のように事情を知らない人には前以て言っておかなければならないはずだったのだ。

「いや……、この子の場合さ、毎年そうなんだけど」

「ごめん。今日はこれからちよつと予定があつて」ナコのフォローに被せるように自ら言う。と、「用事？」

「うん」一体全体それはどんな用事なのだろうと顔全体が語っていた。けれどもそれは無理もない反応である。なぜなら彼女は俗にいう「移入組」と呼ばれる人間であり、しかもこの町へと越してきたのはつい一年前、高校入学と同時になのである。すでにもう五年来この町に住んでいる私やナコのように今日は今日という日を特別視できないのは当然のことだった。だから少しくためらいがちに、けれども率直に、友人からの折角の申し出を断らざるを得なかったその故

を告げた私に少しだけ彼女は気不味そうな顔をした。  
「ちよつと……、慰霊祭にね」

今から十六年前、未曾有の大災害に見舞われた私たちの町は、その復興の過程において不可避免的な人的資源の補充を余儀なくされていた。

一つにそれは震災の余波である原発事故が齎した住民流出が原因であり、一つにそれは震災そのもの、多くは太平洋から押し寄せた大津波によって奪われた直接的な人的損害が原因である。

数にしておよそ二千人。被災地域全体の被害からしてみれば十分の一にも満たない数ではあるけれど、市町村単位で見れば決して少ない被害ではなかった。それだけの人命が一瞬にして奪われてしまったのである。

以来住民の生活圏である丘陵地帯を除くほとんど全ての低地が原則的には居住禁止区域とされて、今や一面のソーラーパネルと菜の花畑に覆い尽くされていた。

「澄美香……、澄美香？」

「え？」窓の外を流れる景色に今は無きかつての町の風景などを想像していると、隣の運転席から声が掛かった。「何？」

「いや……、もしかして今日何か約束とかあった？」

「ううん。別に」

何だろう。何やら声の調子が深刻そうだったのでもっと重大な話かと思つたら、意外に肩透かしである。

私は振り向けた視線を元へと戻しつつぶっ切ら棒に問う。「それが何？」

「何……、つてわけじゃないけどほら、誕生日なんだし、お友達から何か誘われたりとかしてなかったのかな……、つて」

朝家を出る時にはこちらの方が待つことになるような言い方だっ

たにもかかわらず、いざ校門の前まで行ってみるとそこにはすでにもううちの車が堂々と横付けにされていた。その時一緒にいたナコたちの姿を見てそんなことを思ったのかもしれない。

「別にいつまでもこっちを優先してもらわなくちゃならないってわけでもないからさ。前もって言ってくれば別に」

「分かつてるよ」

けれどそんなことはもう今までに幾度となく聞かされてきていることである。今更と言えば今更の話であった。

「そう」

それはどこか納得し切れていないというような口振りではあったものの、母はひと言告げるとそれきり口を閉ざした。それから私は再び意識を窓の外へと集中させて、今ではない、見も知らぬ時代の風景をそこへと思い浮かべてみようとして試みる。けれどそれは容易には敵わぬことであつた。なぜなら私の視線は早くも暮れ始めた空の色を映して仄かに赤い。一面のソーラーパネルの上に広がる空漠とした虚空をさ迷うのみで、どこにも引つ掛かりを得ることなどできないのである。

この町はそう、余りにも「空白」が多過ぎた。

それは例えば今日の前にあるような実際の空間としての空白それであつたり、またはその在り処かを社会という目には見えない場所に持つものであつたりした。

それら空虚な傷跡を覆い隠すために必要とされたものがつまりはこれら一面のソーラーパネルの群れであり、また彼ら俗に「移入組」と呼ばれる人々たちなのである。

それでは翻つて私たちのような人間はなんと呼ぶのかと言われれば、それはそのものずばり「帰郷組」と言つた。被災後の一時期を否応なく外で過ごしたものの、当時まるで焼け野原と称されたこの場所被災地へと、それでも帰つて来た人々のことである。

私自身は生まれも育ちも域外そとなので厳密に言えばその言葉の定義には掛からないのだけれど、この町は父の故郷であつた。

そして祖母と、今は亡き祖父が長年を生きた思い出の場所でもある。

この町に住むそれら人々にとって、今日というこの日はもちろんただの震災記念日というだけでは終わらない特別な日なのであった。

一日の旅程をようやく終えて、遙か西の果てへとたどり着いた太陽は、すでに半身を山の端に隠し、暗い、長い影を私たちの元へと投げ掛けていた。

広場の中央にすえられたモニュメントは純白の大理石を夕茜に染めて、今や淡い鴉色である。

広場のそこそこには蠟燭の仄かな揺らめきが照らし、薄闇の中から更なる闇を炙り出さんとしてもしているかのよう。赤々と灯る炎の光に広場は一種異様の夢幻境へと様相を変じ、辺りには最早賑やかな人声は絶えていた。

今宵はそう、十六年目の慰霊祭である。

去年は十五周年ということもあって取材に駆け着けたマスコミの数も多めであったと記憶しているが、今年はその反動とばかりに部外者の姿は少ない。

そんな中、しかし私たちにとっては例年通りの今日というこの日である。

肅々と進む式典は町長の開式の言葉から始まって、今はもう遺族代表による追悼の言葉も終わり、参列者全員での献花が始まっているところであった。

私と祖母は二人並んで手に花を携えつつ、自分たちの順番が回ってくるのを待っている。と、また一つ順繰りに行列が進み、私と祖母は一歩足を前へと踏み出した。そのあとを母も一つ後ろから追って来ているはずである。

そして誰も 誰一人、もちろん無意味に声を発する者はいない。

聞こえるのは時折起こる咳払いのような、或いは嗚咽のような小さな声と、そして聳える慰霊碑の向こうから伝わってくる静かな波の音だけである。

こんな時には私はいつでもそうだった。一体どんなふうな顔をすればいいのか分からなくなる。

子供の頃、まだまだ周囲の事情に無頓着でいられた頃は良かった。雰囲気は呑まれるだけで自然と思考が頭の中から消えてくれたからである。でももちろん今は違う。

考えまいと、考えても仕方のないことだと自分自身に言い聞かせれば聞かせる程に、無意味に思考は空転し、ぐるぐると同じところを回り続ける。

どうして私はこんなところにいるのだろう。

何でそれをみんなおかしいと思わないのだろう。

だって私は何も知らない。

十六年前、私がこの世に生を享けるのと相前後して起こった大災害を、しかし私はこの目にじかに見ることはおろか、父や母がそうであったようにその当時の時代の空気をリアルタイムで感じ取れたわけでもないのである。

ならば一体何に思いを馳せ、何を思い浮かべ、そしてどのような感慨を持つべきだというのだろうか。

確かにそこにあるはずなのに、しかし見えてこない、その何か。

もしかしたら私はそれをこの目に見れぬことを、妙な負い目のように感じてしまったのかもしれない。

慰霊碑への献花も終わり、全ての参列者たちが自分の席へと帰り着いていた。その折を見計って蕭やかに告げられる、司会者の黙祷を促す声。

人々が各々深く思いを凝らす様子がひしひしと肌に感じられた。私もそれに従い目を閉じて、暗闇の中に再びその見えない何かを探し求めようとしていた時のことである。

「お前たちは！」



静寂を切り裂いて響く、悲痛な音色の叫び声。思わず振り向いていた私の視線のその先でなおも言う　その叫び。その問い掛け。それを聞いた途端私は、だから思わずそれを自分自身へと向けられたもののように錯覚してしまっていたのである。

「分からないのか？」

遺族席の後ろの方、一般参列者のいる辺りである。沈黙を一転、がやがやとざわめき始めた群衆の中から一人、私と同一年くらいの少年が姿を現していた。そして歩みを慰霊碑の方へ、まるで何物かに引き寄せられでもしたかのように進み出ると、指を虚空へ　ちようど慰霊碑の聳えている辺りである。そこへと向けて　、  
「いるだろう？　そこに！」

彼は一体何を訴え掛けようとしていたのだろうか。

分からない　伝わらない。私たちはだから誰一人として彼のその言葉に応じることができずにいたのだけれど……でも、当然いつまでもそのままといいわけにはいかない。

「ちよつと、君？」

とつさのことに思わず我を失ってしまったのだろうか。しばらく呆然と立ち尽くしていた司会進行役がしかし流石に自分の職務というものを思い出したようである。

突然現れたその闖入者を排除すべく強い語調で呼び掛けつつも駆け寄っていったのだけれど、その手が肩へと触れるか否かのところであった。少年は体を翻し、すり抜ける　そのままの勢いで更に歩みを重ねると、いつの間にかこちらの方へと近づいて来ていて……、「え？」思わず当惑の声を上げてしまっていた。私のすぐ隣である。

祖母の座る座席のすぐ目の前に、なぜだろう。ひどく苦しい表情を湛えながらもその少年は立ち尽くして……、赤い夕陽に染まるその顔を、私はなぜだかとても綺麗なものだと感じてしまっていた。が、そんな風ないささか場違いな感慨もそのすぐあとには粉微塵に粉碎されていた。

「あんたは被害者<sup>ひがいしや</sup>だろ？ 十六年前の」

「え？」今度は祖母の番である。藪から棒の呼び掛けに呆<sup>ほう</sup>けたような声を返すのだけれど、向こうはこちらの返事などどうでもいいようだった。

「なのはどうして気づかない？ あれが、本当に見えないのか？」

「ちよつと！」

祖母の困惑などどうでもいいかのように一方的にまくし立てる少年に、流石に腹が立った。私はだから横合いから二人の間に割って入ろうとしたのだけれど……、「え？」

不意に力が抜けた。

いや、と言うよりもまるで体が見えない力に押さえつけられでもしたかのように急に重たくなっていて……、「澄美香？」思わず地面へと両手を着いていた私に母が声を掛ける。が、やはり少年はそんなことにもお構いなしである。

「よく見てみる！ あれを！ あんたたちが招いたものだ！」

「君、いい加減にしなさい！」ようやく駆け着けた司会役の男性に羽交い締め<sup>はぎあいまめ</sup>にされつつも、しかしその手はいつの間<sup>いつのまに</sup>にやら祖母のか細い腕を掴み取ってしまった。

「目を背けても消えはしない！ あれの名を、今こそ思い出すべき時なんだ！」

なおも叫ぶその不得要領なセリフをしかし、どうしてだろう。私はそのあとずいぶん<sup>とと</sup>と長い間記憶の中へと留め<sup>とど</sup>めて続<sup>つづ</sup>けていたのだった。

「で？ 何なの？ それ？」

「さあ、知らない」

「知らないって……」

それはないだろうと言わんばかりであったが、そんなもの私に聞

かれたところで困る。

いささかぞんざいな調子にナコに答えると、目の前のケーキに更なる一撃を加え、切り取った断片を口の中へと放り込んでやる。と、甘やかな味覚が舌の上で蕩けた。

今は昨日の振替日として、記念すべき十六歳の誕生日をケーキ屋で祝ってもらっている最中である。

「大体そのあと聞いた話じゃその子うちの町に住んでるわけじゃないらしいし」

「？その子？つて、年下だったの？」と、これは七海である。

「分からないけど……、多分」自分よりは幼いように見えたがもちろん確信はない。

「なんにしたってほんとに意味不明なんだから、言ってること、理解できた人なんていなかったと思うよ？」

とはいえしかし、その言動はともかくとして意味不明と片付けてしまえないことが一つだけあった。「ただ……」

「ただ？」促すナコに頷いてそれを告げる。「その子に睨まれた途端に何だか急に体に力が入らなくなっちゃって……、私」

一体あれはなんだったのだろう。と、これはもちろん私としては大真面目な話のつもりだったのだが、「はいはい」余りにぞんざいなナコの返答と、七海に至っては露骨に目を逸らしていたりした。

「ちょ　、何？　真面目な話なんだけど」

「そりゃあよかったよ。澄美香にもようやく春が来たかそうかそれはよかった」

「つてそうじゃなくて」

「まあいいからさ。そういうことは何かもつと明確な進展があつてからにして下さい。で、今でもう何だか渡したくない気分ありありではあるのだけれど、折角用意した私の気持ちが報われないのはいどうぞ」

なんとも投げやりな調子である。本来ならば心を込めて渡して欲しいところではあるのだが、この際もらえるのなら何でもよかった。

「これはこれは」と、妙に恭しい態度で受け取るそれは、どうやら去年と同じく見慣れたロゴの紙袋である。願わくは中身まで同じではないことを祈りつつ中身を確認しようとしたところで、「はい、私も」と、続けざまに七海からもであった。

「いやー、悪いね」

多分二人一緒に買いに行ったのだろう。同じお店のものであるらしかったが、こちらはナコからのものよりひと回り程大きかった。差し出されたそのプレゼントの包みを私はありがたく受け取ろうとしたのだけれど……なぜだろう。「あっ」思わず取り落としてしまっていた。その故を私はそのあとすぐに響いたナコの声に我に返りつつも悟っていた。「何？」

地震である。しかも結構大きい。私たちは各々言葉になるかならないかの擦れ擦れの声を上げつつも無意識に店の天井の辺りを仰ぎ見る。と、すぐ傍<sup>そば</sup>にあつたペンダント型の照明がかなり大きく揺れていた。が、更にである。すでに限界まで振れていた振り子が強引に弾き飛ばされたかのように大地が揺れていて、「澄美香！」気づけば二人はすでにテーブルの下へと避難していた。私も呼び掛けに応じてすぐさま体を滑り込ませるのだけれど、流石に三人が入ると中はぎゅう詰めである。どうにか頭だけは完全に隠すことができたものの、背中半分外へと出てしまっていた。そんなような状態で私は一体どれくらいの間そうしていただろうか。恐る恐るという風にナコが聞いてきた。

「やんだ？」

「ん……、かな？」

「大丈夫そう」そういつていち早く外へ出たのは七海である。「大丈夫？」ナコがその様子をテーブルの下から窺いつつ聞くが、返事を待つまでもなく自分も外へと出る決意をしたらしい。おっかなびっくりという体<sup>てい</sup>にはい出してくる。

私はといえばすでに天井に揺れる照明を見上げながらテーブルの傍<sup>そば</sup>へと立っていた。が……何だろう。この胸騒ぎ。胸の奥底が何だ

かそわそわと落ち着かなくて、私はどうやらずいぶん普通ではない様子をしてしまっていたらしい。

「澄美香？」

ナコの心配気な声にはつとなる。や否や、それをまるで合図にしたかのように私は制服のポケットから携帯を取り出すと、初めはメールを、しかしすぐにそれよりはと思い直して直接電話を掛けてみることにする。が……、呼び出し音が一回、二回、三回、四回……、まだ出ない。焦れてディスプレイを見る。が、それでもまだであつた。

祖母の携帯へと掛けた電話はしかし一向に繋がる様子がなく、私は気がつけば座席の足元に置いておいた鞆を引たくるようになて手に携えていた。

「ちよつと澄美香、プレゼントは！？」

「ごめん、あとで連絡する」

もう自分でも一体何をそんなに焦っているのか分からなかった。けれどその時の私の脳裏には昨日のあの少年の横顔と、そしてそれに怯える祖母の姿が嫌に鮮明に映し出されてしまっていて……、慌てた調子のナコの声を振り切るように私は、折角のプレゼントと二人を残してその店から飛び出してしまっていたのだった。

学校からも程近いその店から駅までは歩いても十五分くらい。本気で走れば五分である。私は肩で息をしながらも折好くやって来た電車へと飛び乗ると、倒れ込むようにして座席へと腰を下ろしていった。

どん、どんと、心臓の音がまるで荒々しいノックの音のように胸の中に響く。おもむろに動き出した車窓の景色が思ひなしかいつもよりも遅いような気がして、私はひとり得も言われぬ焦燥に駆られていた。

果たして大丈夫なのだろうか。

その安否が気掛かりで、一秒でも早く無事な姿を確認したくて……でも、どうしてだろうと、ふと自分自身の思いに首を捻る。だって考えてもみれば私の逸る気持ちの行く先はそう　あの祖母なのである。

十六年前の大震災からこの方、人一倍地震それに対する備えを万全にしてきたはずの人物。

だから彼女の部屋はもちろん私たちの住む家にあるあらゆる家具という家具は壁にしっかりと固定されていて、家自体もそうだった。それは近所のほとんど全ての家屋がそうであるように、決して先程の地震程度で問題が起こるような代物ではないはずなのである。なのにどうしてだろう　私の心は不安で千々に乱れ、それからバスへと乗り継ぎ自分の家へとたどり着くまでに感じた時間の経過は、何だか途轍もなく長いもののように感じられたのだった。

見慣れた停留所へと転がり出るように降り立つと、そのまま息も吐かず坂道を駆け上がって行く。路傍に自生している菜の花が今正に見頃という状態を迎えていたが、もちろんそんなものに目をくれている余裕はありはしなかった。

私は息急き切りながらも低い生け垣に囲われた我が家の姿を確認すると、郵便受けの脇にある玄関まで続く小道へとようやくたどり着いていたのだけれど　足は、目的地に到着する前に動きを止めてしまっていた。

なぜならすでもう目的を達してしまっていたからである。

「おばあちゃん！」

向かう先、視線のその向こう、玄関の前で祖母が倒れているのが見えた。

いつになく静まり返った家の中で、玄関の辺りから聞こえてくる

その声は嫌に耳に鮮明だった。

それではお大事に　と、穏やかな調子に告げるのは近所に住む開業医の先生である。その声に応えるのはこちらは母。ありがとうございました　と、どこか懺悔でもしているかのような暗く、そして重いそれは口調であつた。

玄関のドアが閉まる音がしてからしばらくして、こちらへと足音がやって来る。

「澄美香」祖母の自室。襖ふすまを開けて、家で唯一の和室であるそこへと母が顔を出す。

「もう大丈夫だからさ。あんたももう……」

「仕事」

「え？」先程までひどく苦しげだった祖母の顔は、今はもう安らかな寢息に彩られていた。その様子を枕元で眺めながら私は言う。「仕事……、大丈夫だったの？」

「あ、ああ……」何だと、まるでとんでもない聞き間違いでもしていたかのようだった。ほっと胸をなで下ろすような様子に答える。

「大丈夫よ。今日は別にそれ程忙しくなかったから」

「そう」それなら良かったと続けようとして、でも実際には言葉がなかった。代わりに祖母の顔を熟々つくつくと眺めつつ、「でももう少しだけ……」と、自分の方から脱線させた話を元に戻す。

「分かった……けどご飯くらい食べなさいよ？　ちゃんと用意しとくから」

「お母さんも」

「当然、もうお腹ぺこぺこ」そう言つて満面の笑みを浮かべる彼女はなんとというか、我が母ながら相変わらず敵わないと思わせる。

「それじゃあね」

「うん」襖を元通りにぴたりと閉めてリビングの方へと去って行く母の足音を聞きながら、私はけれど彼女のように笑うことはできなかった。

だから他にどうしていいのか分からなくて、再び祖母の顔へと視

線を戻す　と、うつと、少しく開いた口から掠れた声がこぼれていた。

「おばあちゃん？」多分起きたわけではない。だから私はつぶやくような微かな声で言いつつその寝顔を見守るのだけれど、その次の瞬間、まるで心臓を鷲掴みにでもされたかのような衝撃を受けた。

「あなた……」

きつと夢の中に現れた人物に呼び掛けたのだろう　その寝言は、しかしにわかにはいつもの祖母がつぶやいた言葉<sup>もの</sup>だなどとは到底信じられないような音色で私の耳には届いていたのだった。

医師の話ではそれはそこまで心配するようなものではないという。原因は恐らく心因性のものだろうと。でもその日を境に祖母はほとんど寝た切りの状態となってしまうていて、しかもそれだけに留まらないのであった。

それから一日が過ぎ、二日が過ぎ、やがて一週間が経とうとしていた頃になると、もうその手の話は耳に胼胝<sup>たこ</sup>ができるという程にある。聞こえてくる噂話に鑑みるに、どうやらそのような異変はひとり我が家に限ったことではなかったようなのであった。

今から十六年前、当時ここで例の震災を体験した人たちが挙って体調不良を訴えているというのである。町はにわかには　しかし隠然と、不穏な空気に包まれ始めていた。

「……っていう話らしくってさ。もしかしたらなんだけどその子なんじゃないかなあって……、澄美香？」

「え？　何？」すっかり上の空であった。机の上に突いていた頼杖を外してナコの方を見ると、そこには話を無視されて憤然　といった表情ではなく、すこぶる真剣な調子の憂い顔があった。「大丈夫？」心底こちらのことを気遣ってくれている様子である。



「うん……。ごめん。ちょっと考え事」

「そっか……。いや、こつちもそんなに大した話じゃないからさ」  
終業式も間近に迫り、今日も短縮授業である。あとは担任の到着を待って下校となるばかりの解放感漂う教室の中で、しかし私の心は一向に晴れる気配がなかった。

いつもならば寸暇を惜しんでのおしゃべりとなるはずが、どうやらナコに一方的に喋らせてしまっていたらしい。未だ現実感のない意識のまま謝罪の言葉を口にしたのだけれど、「ただこの前言ってた男の子らしい人物をうちのお姉が見たっていうからさ」

だからと、ナコは何やら気になるセリフをこぼしていた。

「男の子？」

「ほら、この前言ってたじゃん。慰霊祭に乗り込んできたっていう」

「ああ」あの少年　と、脳裏にあの日の光景を思い浮かべてみる。そうだった。考えてみればあれが始まりだったと言えないこともない。そのことに気づくと私は何だか急にその彼の存在がひどく重要なことのように思えてきて……。え？　何？」無意識にナコの腕を掴んでいた。

「教えて、詳しく」

去年の春に短大を卒業し、それからというものの地元の図書館で司書をやっているナコの姉が言うには、その少年　ここ数週間の間毎日のように通ってくるのだという私たちと同年くらいの男の子は、どうもこの町の住民ではないようなのである。

なんでも閲覧する本という本が地元の郷土史やら何やらで、明らかに部外者の立場でこの町のことについて色々と調べているものらしい。

そしてどう見てもまだ中学生か高校生くらいの年頃であるにも関わらず、平日の昼間から入り浸っているのだという　その話を聞

いて、私はなぜだか確信してしまっていたのだった。その彼こそがそう、あの日祖母の腕を取って訳の分からぬ何かを叫んでいた少年に違いない　と、そう思い込んでしまっていた私はだから、その日の内にその市立図書館　学校から更に電車で一駅向こうへと行った先にある近辺でもかなりの規模を誇るものである　ナコの姉の勤務先へと足を運んでいたのだった。

普段中々来ることのない場所なので少々まごつきつつも中へと足を踏み入れる。と、ぱっと見にやはり人はそれ程多くないようである。

恐らくは休日の方が利用者は多いのだろう。閑散とした館内を奥へ奥へと進んで行きつつ書架の間へと素早く視線を走らせていると、ふと目の中に飛び込んできた映像に私は足を止めていた。

遙か彼方、二つの書架の谷間が作り出す一本道のその果てに、閲覧の便に供するためにであろう　用意されていた長机と椅子が見えた。

私は弾かれたようにそちらへと進路を転じると、初め歩調は先程よりも速く、しかし次第に緩やかに、まるで餌を啄む小鳥を後ろから捕まえようとでもしているかのような慎重な足取りで近づいていくと、最後にはもうほとんどにじり寄るような調子にである　歩を進め、そしてごくりと思わず息を呑む。視線の先、すぐ目の前でやはりそうである。その少年、あの日見た彼がひたと視線を手元の本へと向けていた。

「あ……」我ながら情けない声だと思った。調子外れのひと声を上げてから、「あの……」と、今度はやや取り繕った声を掛ける。が無言。まるで聞こえてはいないという風に机の上に広げた本のページを捲っている。なのでもう一度、「あの、ちょっと　、君」今度は更に声量を上げての呼び掛けである。そこでようやくページを繰る手が止まったと思いきや、まるで親の仇でも見るかのような鋭い視線。上目づかいにこちらを見すえながら彼は短く端的に言った。  
「誰？」

一瞬怯むも素早く答える。

「私は愛沢澄美香。すぐ近くの高校の生徒で、あなたとは前に一度会っている」

「そう？」興味がないとばかりに肩を竦めつつ、早くも視線はもう本の方へと戻ってしまっていた。

「憶えてないの？」

「生憎」全く残念でも何でもなさそうに答えるが、その素っ気ない態度が私の気持ちを逆に落着かせていた。「震災記念日の日、いたでしょう？ 君、慰霊碑広場に」

「ああ」そういえばと、本当にどうでもいいことのように言う。「それで？」

「え？」

「だからそれで？ 僕に一体何の用？」

そこでようやくであった。言われてはたと気づく。確かにそうだ。そもそもがどうして私は彼を探そうとだなどと思い立ったのだろう。何とも間抜けな話ではあるのだが、私はそこで初めて自分の感情の部分と論理の部分がひどくちぐはぐなことになっていることに気づいたのであった。思わず呆然とその場に立ち尽くす。が、それでも、事ここに及ぶと私は何だか妙に開き直ったような気持ちになっていた。

気を取り直すと目の前の座席 彼の対面の席へと腰を下ろしつつ言う。

「私の祖母が倒れたの……。一週間くらい前に、大きな地震があったでしょ？ それからずっと調子が悪くて……でもうちだけじゃないの。町のお年寄りで震災を経験した人はほとんどがそう、原因不明の体調不良に見舞われてる」

「で？」まるで気のない返答に今度は鼻白んだりはしない。

「君、言ったよね？ あの時、『分からないのか？』って。それでこうも言った。『名前を思い出せ』って。あれは一体」

何のことだったのかと、そう問い掛けようとした言葉の先を封じ

るかのようなだった。ばたりと、些か乱暴な音と共に本が机の上で閉じられる。

「それが君と何の関係があるの？」

言われれば正論。けれどここまで来たらもう引き下がるわけにもいかない。

「正直なところを言えば私にもよく分からない。けど私にはどうしても今この町で何かが起こっているようにしか思えなくて……」

「それで？」挑み掛かってくるかのような視線にこちらも負けじと見つめ返す。

「もしかして君はそのことに何か関係があるんじゃないの？」

もちろん根拠も論理も全くないただの憶測であり、いつそ妄想とさえ言えるようなそれは問い掛けだった。けれど少年はそれに笑うことはせず、むしろ先程までより幾分真面な態度になったような気がした。指を表紙に這わせていた本を脇へと押しやると、今度は真つ直ぐこちらを見すえてくる。

「君は今、この世界で一体何人の人間が餓えに苦しんでいると思う？」

「……は？」流石に反応が一拍遅れた。だつて余りに唐突なのだ。思わず鼻白む私に彼は頓着なしに更に言う。「では今現在、常態的な内戦状態にある国の数は？」

「……さあ」さっぱりである。それはもちろん質問の答え自体もそうだったが、そんなことを今問うてくる彼の意図そのものがそもそも不可解であった。

「それが一体今の話と何の関係が」

「ないよ？ でもそれは君がさっき言ったことにしてもそうだ。今この町で何が起きていようと君には関係がない。それは今から十六年前にこの場所で起こった震災についてもそう。君とそれら問題の間には理解の面や時間的な面において心理的な距離があるのだから。なのに君はどうしてその特定の問題に対しては立ち入る意志を示し、けれどさっき言ったような世界の問題に対しては関知しよう

としない？」

「それは　だつて」

「身近な問題だから？　ではその線引きは一体どこですか？　この町で起こる問題が君にとっての問題だというのなら隣町で起こる問題は？　君の問題？　だとしたらその更に隣町で起こる問題は？

それも君は自分の問題だと言うつもり？」

「ちよつと　、待つてよ。なんで今そんな話」

「君が始めた話だよ。個人と社会の問題についての話だ。僕とこの町の問題に何か関係があるのかと問われれば答えはイエスだ。けれどそれは今言つたような線引きの問題で幾らでも無関係ということにもできる。だから君にも問うているのさ。君にとっての問題の要件とは一体何であるのか、と」

「要件？　そんなの自分がどうにかしなきゃって思うことに決まつてるじゃない」

「なら君は今この世界で起きている他の様々の問題は別段解決する必要のないものだと考えているということ？」

「いい加減にしてよ」

もちろん声は低く抑えていた。けれどそれなりに周囲に人がいたならば強かに非難を蒙つてしかるべき声量ではあつた。なにせここは図書館なのだ。

私は波立つた胸をなだめるように息を吐くと、我ながらまるで言ひ訳のようだと思つた　ひどく苦々しい調子に自己弁護の言葉を口にする。

「そりゃあ私だつて自分に何か力があればそういうことをどうにかしたいと思うよ？　けど無理でしょ？　だつて私には何の力もない。ただの高校生なんだから」

だからと言いつつも私は、しかしてつきり先程までと同じく即座の反論があるとばかり思つていたのだ。なのに今度は嫌に静かである。どうしたことかと妙な不安に苛まれていると、彼は何やら驚きに見開いたような目で私を見つめていた。

「君の名前が分かったよ」

「はい？」思わず調子外れの声を漏らす。だって今更であつた。一体何を言っているのだらうと訝るも、向こうは先程までのどこか不真面目な態度をすっかりと脱ぎ捨て、今やその瞳には微かな怒りの色さえ感じられる。

「盲目の求道者……。それでは目がよく見えなだらう？」

「え？」一体何を言っているのだらう。流石に怯むがそんな私の心の動きを機敏に察したかのようなふた。機先を制するように音もなく立ち上がると、彼は机の上に身を乗り出してこちらへと迫ってきていて……。「ちよつと、何？」

「動くな」

あの時と同じだった。いや、或いはそれ以上だったかもしれない。あの日、慰霊祭での邂逅の時と同じように私の体は全く自由が利かなくなつてしまつていて、まるで金縛りにでもあつたかのように。

ただただ目の前で進行する状況を無抵抗に受け入れるしか術がなかった。そんな私の額に彼のその冷たい指先が触れる。

「アポロギア、君にこの世界の本当の名を教える」

そして世界は暗転する。

目を覚ますと時刻は最早夕暮れ時であつた。

居並ぶ書棚の上、壁面の高い位置に並べられてある採光窓から注ぐ陽光は、たつぷりと濃い紅を帯びていた。

私は突つ伏していた硬い木製机の上から顔を上げると、静寂に包まれていた辺りを見回してみる。が、誰もいない。

恐らくはもう閉館間際という時間なのだらう。書架の前に立つて目当ての本を探しているような人物も、椅子に座つて調べ物に勤しんでいるような人間も誰もいない。だから私もどこかその光景を夢の延長線上のようなものと勘違いしてしまつていたのかもしれない。

が、当然そのような錯覚がいつまでも続くわけがなかった。

「え？」

思わず声を上げつつ立ち上がると、目の前の席を確認する。がしかしいない。

そこにはつい先程まで私と言葉を交わしていたはずの少年の姿はなく、しかもその？つい先程？というのも実際にはどれくらい前のことであつたのか判然としないような状況である。

「夢……？　なわけないか」

ひとり言にその可能性をつぶやくも、流石にそこまでを疑うのは考え過ぎなような気がした。私は首を捻りつつもその場から立ち去り、来た時よりも更に閑散とした館内を出口まで急ぐ。恐らくはもうあの少年はここにはいないだろうし、何より妙な胸騒ぎがしてならなかった。

だから私はまるでそそくさと逃げるようにその市立図書館から足を外へと踏み出していたのだけれど、自動ドアのその向こう。夕間暮れに昏い景色を目の当たりにした時、私は思わず手にしていた鞆を取り落としそうになってしまっていた。

だって……、「何？　これ」

付近はなだらかな丘陵地帯の上である。玄関前に設けられた広場のその向こうには延々と下って行く地平があり、そしてその更に向こうには微かに見える太平洋の水平線と広大な空　暮れ残る光をうつすらと点すのみの藍色のスクリーンが広がっていて……でも、そこには未だかつて私の見たことのないような異様な姿の生き物が、その不気味な姿を無数に点在させていたのであった。

その余りに非現実的な光景に思わず息を呑む。と、そのさまをあたかも嘲笑うかのようなのである。

「見えるかい？」

気づけばすぐ近く。広場の一面に植えられていた樹木の陰からあの少年が姿を現しつつ私に語り掛けてきていた。

「初めて見ると正直不気味だろう？　あんなもの　どんな生物図

鑑にも載っていないんだから。でも見慣れてくると案外可愛気があるものだよ」

「冗談じゃなかった。可愛気？　だってあれは……今私たちの目の前にあるものはまるで生物の教科書で見たような浮遊生物　プランクトンのなりである。半透明の体の中に時折きらきらと光る粒子のようなものを孕んでいて、その動きは至って緩慢。意思があるようでない。ないようである。ただただもう不気味としか言いようのない代物なのである。が、もちろん今はそうではなかった。問題なのはそんなことではなく、そもそもの話である。

「な……、何？　あれ」からからに渴いた喉からようやくそれだけの言葉を絞り出すと、彼は事もなげに答えた。

「あれは陰陽思想で言うところの陽の気、魂魄こんぱく二極の魂こんを成すものにして破壊衝動に内在する再生の願望、理想化された女性像、つまりはアニマ……。僕は『転生魚てんせいぎょ』、或いは『レーテの魚』と呼んでいる」

全く話についていけない私を、しかし彼はまるで弄んででもいるようである。満面の笑みを浮かべて言う。

「ようこそ　、真実の世界へ」

きつと私は夢を見ているのだろう。けれどその夢はどうして妙にリアルな感触で、醒めるはずの夢がしかし醒めないものと知ったのは、それからしばらく経ってからのことになる。

「今君の目の前にあるのがこの世界の本当の姿だ」

世界は多分、とんでもなく理不尽だ。



## 第2話 「イエローガーデン（後編）」（前書き）

本作は架空の大震災・大津波の被災地を舞台に取っています。

実際に何らかの災害の被害に遭われた方や関係者の方の中には、或いは作中での災害の取り扱いに不快感を覚える方がおられるかもしれません。

お読みになる前に以上の点をどうかご確認お願い申し上げます。

## 第2話 「イエローガーデン（後編）」

目を開くとそこには紛れもない現実の世界が広がっていた。

見慣れた天井を仰ぐ視界にはもうどこにもあの不気味な浮遊生物  
フラインクトン  
のようなモノは浮かんではおらず、世界は至って平穏である。

私はおもむろにベッドの上へと上体を起こすと、ゆっくりと深呼吸。それから視線を左の方 今や目映ゆい朝日の光に満ち溢れているに違いない 屋外そとの明かりをうつすらと零しているカーテンの方へと向けると、ゆっくりと立ち上がる。と、にわかには不安が胸の中に兆した。とは言えよもやそのままそこに立ち尽しているわけにもいくまい。

私は意を決したように窓の方へと向かうと、再び大きく深呼吸。目を閉じて心を落ち着かせると、意を決して目蓋を開くのと同時、思い切りよくカーテンを開け放っていた。

もちろん、そこに昨日の朝と同じ現実を期待して……。

「今日学校休もつかな……」

ひとり言めかしてつぶやいたセリフはもちろんただのひとり言ではない。

が、「何言ってるの」向こうはそんなものには全く取り合うつもりはないようである。

「いいから早く食べなさい。遅刻するわよ？」

「だからあ……」

コーンスープを掬っていた木の匙を置いて、今度はもう直接相手の顔を見て訴え掛けるのだけれど、もちろん我が母がそんな安手の

お涙頂戴に乗ってくるはずもなかった。

テーブルの上にサラダを置くとこちらの言い分など一ミリも聞く気配もなくさつさとキッチンの方へと戻って行ってしまう。なので私はもう大仰に天井を振り仰ぐなりああと最早この世の終わりを目前にしたかのような声を上げるしかないのであった。

何だかもう食欲も出ない。

「ごちそうさま」私はまるでため息でも吐くかのように言うと、嫌に耳に能天気な響くテレビの音を背にして席を立ち上がる　と、  
「え？　何……まだ残ってるじゃない」当然のように母がキッチンから顔を出しつつ言った。

「いい……、もう」何を言っても無駄なのだ。不貞腐れたように私は席から立ち上がると、引きずるような足取りで廊下へと向かう。そして置いておいた鞆を持って、一路玄関へ　ではなく、奥の和室の方である。憂鬱な足取りを向けて、でも声だけは努めて明るくした。

こつこつと、襖ふすまの棧さんを拳の背で叩いてから言う。「おばあちゃん、行ってきます」

もちろん起きてない場合もある。故に毎回ひかえ目な調子を心掛けつつあいさつの言葉を述べるのだが、どうやら今日は大分具合がいいようであった。襖の向こうからはいつにない張りのある声が返ってくる。

「行つてらっしゃい」

何だかひどく救われたような気分だった。だからもう一度、今度は明確に相手に告げる口調で言う。「行ってきます」

出発のあいさつを述べると今度こそ、私は意を決したように深呼吸をひとつしてからその歩みを玄関の方へと向けて、そのままの勢いで外へと飛び出していこうとしたのだけれど、やはりいざドアを開くという段になると腰が引けてしまっていた。

だがもうこれ以上祖母に不安な思いをさせるわけにもいかない。

私はひと時の逡巡を振り切ると、まるで地獄へと続く門を開くよ

うな気持ちでその重く閉ざされたドアを外へと押し開いていたのだ。  
った。

ふと思う。

確か感覚質<sup>クオリア</sup>……と言っただろうか。個人が外界からの刺激によって得る主観的な質感のことを　確かそのように呼ぶのだと誰かが言っていたような気がする。

それは現代科学の難問の一つであり、個人の主観という場を離れては明確に説明できないものなのだという。とすればである。或いは今私のこの目に映っている世界のありさまもまた現代科学の難問の一つに数えてもいいということなのだろうか。

ふとそんな風な馬鹿気た考えが頭の中に浮かび、まあまあやはり馬鹿気た話だと自分自身で嘲笑ってやった。だって　これである。

私はバス停までの坂道を下ってゆきつつ視線を左の方へ。眼下に続く斜面のその果てに広がる一面のソーラーパネルと菜の花の群生を横目に見て取る。と、目の中に飛び込んでくるのは見慣れたはずの、しかし見慣れない光景。

空闊<sup>くうかつ</sup>として豁<sup>ひら</sup>けた大地とその上空<sup>そうつ</sup>に乱れ飛ぶ、不要の夾雑物。

今やあれ程に親しみ深かった我が町の風景は、さながら異界からの侵略を受けてしまってもいるかのよう　何とも異様な生物じみたモノに空を埋め尽くされてしまっていて、在りし日の面影すらない。

まさかこれを科学の範疇でどうこうできるなどとは流石に私自身思っではおらず、だから昨日のあれから今に至るまで、もうほとんど頭がどうにかなりそうな混乱の渦中にいたにもかかわらず、私はそのことを他の誰にも話すことができずにいたのであった。

何せそう　バスはいつも通り。世界がこんな風になってしまったにもかかわらず平然とした顔つきで時刻通りにやってきて、私を

乗せると駅へと向けて走り出す。なのにそう　周囲にいる他の乗客たちはただのひと言もそのことには触れず、剩れ見向きもしないのであった。ならばこれはもうそのことの証左に他ならない。

どうやら彼　昨日のあの少年が言っていたその「転生魚」てんせいぎょ或いは「レーテの魚」、今も車窓の向こうで揺ら揺らと大挙して浮かんでいるそれらのモノは、普通の人々には見えないようなのである。なのはどうしてそれを軽々に訴えることができるだろうか。

精々熱があることを疑われるか、悪くすれば本気でその手の病院に連れて行かれるかもしれないのである。私は他に致し方なし、自分の頭と世界のどちらが狂ってしまったのかを詮索する思考を一旦放擲し、ほうてきこうして今の今までこの異常事態と何とか折り合いをつけてきたのである。が……、バスを降りて電車へと乗り替える。そして学校の最寄り駅へと到着し、いつもの通学路を他の生徒たちに混じって歩いて行く内に、やはりと私は確信していた。

昨日あれから家にたどり着くまでも何となく感じていたことではあるのだが、それらのモノはどうやら周囲に人が増えれば増える程にその数を増やしていくものらしい。

そろそろ丘陵地帯の上の更に小高い一画に聳える私たちの学校の姿が見えてくるところである。運悪く信号に引っ掛かったのだけれど、その頃にはもう周囲は通学途中の生徒たちでいっぱいであつた。が、ふと視線を上げて眺めてみると、そこにはもうほとんど私たち人間の数にも負けず劣らずというようなくらいであつた。

のっそりと、ゆつたりと、まるで海中に漂う浮遊生物フランクトンの体ていで迷いながら、それらのモノは空一面を埋め尽くすように浮いていて、時折その半透明な体を揺り動かすように場所を移動する。と、何匹かがパクパクと口と思しきものを機敏に動かしていた。するとまるで餌を飲み込んだかのように体の中にきらきらと光る細かな粒子が散っていった、やがて消える。と思いきや、また再び何かに反応したかのように場所を移動してはパクパクパク、盛んに体の中に光る粒子を取り込み続けている。私の目にしか映らないこれらのモ

ノは一体何なのだろうか。

赤信号に足止めを食らい、ふと何やら沸々と込み上げてくる怒りに放擲していた思考を思い出し掛けたその時である。いやと私は心の中で首を振っていた。

そう　私だけじゃない。もう一人いるではないか。

昨日体験したあの異常な出来事が脳裏に鮮明に蘇る。と、最早怒りは抑えなど利かなかった。私はまるで八つ当たりでもするかのように憎気の視線をその浮遊生物たちへと注ぎつつ、あの少年への憎悪を更に更に深くしてゆく。と、不意にその中の一匹がまた何かに反応したようである。

ぴくぴくと体を震わせたと思いきや、感情のおよそ読み取れないその顔とおぼしきものをぴたりとこちら　私の方へと向ける。と、「え？」私は思わず驚きの声を漏らしてしまっていた。

だってそれまでのおつとりとした仕種が全くの嘘であつたかのような機敏な動きである。忙しく体を震わせつつも周囲の個体と同調するや否や、それは瞬く間にも私の元へと迫り来ていて　、「や！」まるで水な面の餌を奪い合う鯉の群れのよう。しきりに私の皮膚を啄んできていた。故にそれらのモノから私はとつさに逃れようとしたのだけれど、すでに視界はすっぽりとその異様の生物たちに取り囲まれてしまっていて、だから当て所もなくただスペースのあ  
る方へと踏み出されていた足は、私を白と黒との縞模様の上へと誘  
っていたのだけれど……はつとする私の目の前で、トラックがクラ  
クシヨンの轟音を轟かせていた。

「夢……見てるの？　私」自らの瞳の映すものを信じられずに私は独り言ちる。

「いいや、現実さ」けれどそれを冷淡に、しかしどことなく悪戯っ気さえ感じられるような声で否定する彼。でもそれなら一体何だと

いうのだらう。今日の前にあるこの光景は……。私は図書館から出てきた途端に豹変してしまった世界をただ呆然と見つめるしか術がなかったのだけれど、「テオーリア」

「え？」「またも効き慣れない言葉である。私はもうほとんど条件反射のように聞き返していた。」

「古代ギリシアの哲学者、万学の祖として名高いアリストテレスの説によれば、人間の理性的活動の最高位とはその外界観察作用にあるという。テオーリアとは観察の意。英語のセオリー『理論』

の語源でもある。もちろんそれは単純に肉眼による姿形の把握のみには留まらず、物事の本質へと至る思索的側面をも含めて言うが……早い話、日本でいうところの『心眼』さ」

けれど今度はもう言葉もない。ただでさえ混乱しているというのに、彼は一体何が目的だというのだろうか。呆氣に取られる私にしかし優しい解説など付け加えるつもりは毛頭ないようであった。

暗い薄闇の中、夜闇へと没し掛けた東の空を眺めつつ更に言う。

「今や君はそのテオーリアに目覚めてしまったんだよ。幼児がふとした切っ掛けで死という概念に気づいてしまったように……、或いはそれまで絶対だと信じていた現実がただの欺瞞に過ぎないと分かってしまったように……、僕がそうした」

「何……言ってるの？」最早呪文である。それはただただ無意味に鼓膜を震わせるだけの音の羅列に過ぎなかった。にもかかわらず、更にはその行動までもが奇異へと赴く。

「君がそう望んだからさ。だから教えてあげたんだ。この世界の本当の名前をね」

彼は右腕を目の前へ 私の方へと翳し、手のひらを下へ、まるで操り人形へと繋がる糸を吊り上げるかのような仕種で等分に開いた五本の指をぴんと張り、そこに見えない力を籠めるようにして……、「そしてもう一つ」当惑に眉を顰める私の眼前で、それはまたしても私の常識を覆す光景。「何……？」

彼の足元、レンガ敷きの地面からそれらはごとり、各々納められ

ていたスペースから抜き取られ、浮き上がり、翳された彼の手の周辺でふわふわと漂い始める。

「この世の万物には全て真実の名前　アイデア　が存在する。それはそのものの真の姿であり、またその存在そのものを規定する鍵でもある。だからそれを知ることが取りも直さずそれらのものの命運を握ることに他ならない。ちょうどそれは日本に古来伝わる言霊信仰のように……」

「コトダマ？」最早頭は真面な思考を巡らす用を成してはくれなかった。私はただただ催眠術にでもかかったようなあやふやな意識のまま、全くの無意味に彼の言葉をオウム返しにつぶやく。と、そんな私の反応を彼は一体どのように感じていたのだろうか。

「言は事なり」

まるで意に介さないその様子から推すに、或いはどうでもよいことだと思っていたのかもしれない。

「我々の紡ぐ言葉とは常に事実<sup>ついで</sup>に先んじて存在している。にもかかわらず、ともすれば事実を言葉が追従しているように思うのは、そこに無意識の自己欺瞞が存在しているからだ。人というものはとかく『あるべき姿』に『あつて欲しい姿』を優越させることができない。故に世界は固定化し、人は自らの意志の力を無力と断じてしまう。が、その無意識の自己欺瞞を打破する術もまた我々は持ち合わせている。それが　テオリア　。我々は真実の目によって世界を捉え直すことによって、万物がその内にふくみ持つ『真のあるべき姿』　アイデア　に気づき、以て対象を仮初めの姿より解放する。それはつまり……」

それまでぴたりと宙空で止められていた彼の右手のひらがくるり、まるで水道の蛇口を捻るように翻される。と、それまでふわふわとただ浮いているだけだったレンガたちがその動きに呼応したかのように小さな円を描いてくるくと回り出す。そのさまはさながら円舞を踊るよう。

「意のまま、望むがまま、世界をこの手に握ることに等しい。そし



て……」

ぴたり、再びレンガは動きを止めて静止する　や否や、一直線にである。

「え？」条件反射に驚きの声を上げる私の元にそれら浮遊する

ともすればそう　凶器ともなるに違いない、今やつぶてと化したレンガが迫り来ている　、「きや！」

ひゅんと、風を斬る音が耳元で数回したと思いきや、がごとく、何だか余り耳馴染みのない音が背後から聞こえてきた。なので恐る恐る振り返ってみる……と、「嘘……」

玄関ポーチの柱部分である。堅いコンクリート製の円柱の下に、粉々になったレンガの残骸が無残にもこぼれ落ちていた。

「ちよつと、冗談……でしょ？」

だから私は至って当然の反応をしたつもりだった。だってこれはどう見てもそうである。悪ノリというやつだった。なのに振り返った私の目の前には再び地面から抜き出したのだらう　新たな凶器を周囲に浮かべている彼の姿があつて　、

「アイデアとは万物に隠された真実の名称。故にもちろんそれは人間そのもの　あらゆる個人の一人一人にもまた存在する」

「や！」

今度は大きく体を前へと屈み込ませる。が、きわどさではさつきといい勝負であつた。すぐ頭の上を一瞬の内にレンガが走り去っていくのを感じ、私は流石に血の気が引いた。

よもやこれは一刻の猶予もない状況というやつではないのだろうか。私は今更のように察すると、形振り構わずその場から走り去ろうとするのだが……しかし、

「つまりは君　盲目の求道者　。君自身もまたそのアイデアによって規定され、特徴付けられた一つであるということだ。だからそのアイデアを知りさえすれば君をテオリアに目覚めさせることも、或いはまた　「横目に捉えた彼はすでに次弾の補充を完了してしまっていた。故に弾丸は寸時のためらいもなく私の横面に向けて解

き放たれていて　その瞬間、私は一体何をしたのだろうか。

思い出してみるも記憶は定かではない。けれど肉薄するレンガのその硬質な質感が網膜に焼きついて、次の瞬間にはほぼ確実に起こるであろう自らの負傷に対する苦痛を想像した時、私の脳裏には今と同じである。断片的な言葉がいくつも閃いていて　それは、どこか遠い世界から響いてくる音のようにも思われた。

「ぱあんという、耳を劈く大音響。」

けれどももちろんそれは幻聴ではない。現に今私の目の前にはクラクションを盛大に鳴り響かせながら迫り来る大型トラックの姿が大写しになっていて、やはりそうである。あの時と同じ。一刹那の内にも脳裏には様々の言葉が閃いていて、これはそう　、圧倒的な質量と、そして重量。

轟音を轟かせつつも回る車輪に導かれ、進むその体を自身ですら容易には押し止めることができないに違いない　その他律の機械。対抗する力の不在によつてはどこまでも永遠に転がり続ける運命にあるのだろう　空転する足をただひたすら前へと踏み出し続ける、空回りの車輪　。

ふとそんなふうな言葉が脳裏に閃いた瞬間、目の前に翳した両手のひらの向こう側でがごと、曰く言い難い音が木霊していた。そしてやはりあの時と同じである。

どうしてか、いつまで経つてもこの身を襲うはずの脅威はしかし実際には襲つてはこずにいて　、あの時彼はこう言った。

「アポロギア　アイデアによつて対象を自在に操る力。それに目覚めさせることも可能……ということだ」

それはあたかも永遠にも等しい時間。けれども実際にはほんの数秒だっただろう。私は荒い息を吐きつつその場に立ち尽くし、恐怖に萎縮した両手を中々目の前から下ろすことができずにいた。けれどもにわかには周囲の人声が活気付き、私を気づかうような声すら混じり始めると、流石に我を取り戻すより他ない。

私は両腕の構えを解いて、改めて目の前の光景を確認する。

そこには果たして止まるはずのないスピードで迫り来ていたトラックが、しかし実際にはぴたりと足を止め、剩え、もしもそうなっていないかったのなら私の体の方こそがそうだっただろう　すぐ目と鼻の先、あと一歩前へと足を踏み出せばその中にすっぽりと体が収まってしまふような距離にである。まるで巨大な鉄球を打ちつけられでもしたかのように実に綺麗なクレーター<sup>がた</sup>形を凹ませられてあつて……、

「おめでとう。これでもう君はただの高校生ではなくなった」

最後に彼はそう言った　言葉が嫌に執拗に耳の奥に木霊していた。

「最早世界は君の手の中だ」

多分あの時　、図書館で意識を失った時である。

「アポロギア……、？自叙伝？　か」

私は目の前に広げた分厚いギリシャ語辞典のと或る項目に目を落とすと、ひどく憂鬱な声音でそうつぶやいていた。

つまりは主観に基づく記録。「何でもあり」ということだろうか。手持ちの英和辞書ではどうにも要領を得ないので、本格的にその意味を探るべく学校の図書室へと私はやって来ていたのだが、それは考えてみれば当然のことであつた。その意味が分かったところで実際問題何の解決策にも繋がるはずがない。

私は投げやりな調子に辞書を閉じると大きくため息を吐く。

一体何なのだろうか、この状況は。およそ理解の範疇を超えていて、しかしどうしても悪夢として醒めてはくれないこの現実は、一体いつから私の日常に紛れ込み始めたのだろうか。考えてみるにそれは、やはりあの時を置いて他にはないように思えた。

図書館で彼に額を触られたあの瞬間である。あの時にどうやら私は彼の言うそのアポロギアとやらに目覚めさせられてしまっていた

ようなのであった。が……いやと、そこまで考えて私はうな垂れた額を手の甲で小突く。

これではもうほとんど認めてしまっているようなものではないか。あの白昼夢染みた一連の出来事が事実紛れもない現実であると、確かに私はどこかでそう信じ込み始めていた。だからその望ましからぬ考えを一擲する<sup>いつてき</sup>ように勢いよく立ち上がると、私は手に辞書を携え静謐に静まり返った室内を歩いて行く。

今は授業の合間の五分間休憩である。

当然人気の少ない中を私は辞書コーナーまでたどり着くと、本棚の前で少し背伸びをしつつ手にした辞書を元の場所へと戻そうとしたのだけれど、その瞬間。ぐらり、体が傾<sup>かし</sup>いだ。

何事かと慌てつつも何とか辞書を元の場所に押し込もうとして、しかし敵わずまたである。今度はどすんと真下から突き上げるような強い衝撃。勢い私は辞書から手を離してしまい、激しい揺れに翻弄されるがまま、思わずその場にうずくまり掛けたのだが、それは理の当然であった。目の前の書架から一斉に本がこちらに向けて落ちてきそうになって……もう無我夢中である。私はそれらの背表紙を必死に中へと押し止め<sup>とど</sup>めようとしたのだけれど、果たしてどうやったのだろう。私は、一体どのようにしてその窮地を凌いだのだろうか。

気がつけば揺れはすっかりと収まっていて、何やら貸し出しカウンターの方から声が響いてきていた。どうやら図書委員が室内<sup>なか</sup>にいた生徒たちの安否を確認しているものらしい。やがてその声は私の元へもやってきたのだけれど、「あの……、大丈夫ですか？」

「はい」

答える私にしかしその彼女。いかにも図書委員という雰囲気少女はなぜだかひどく驚いた様子である。どこか納得のいかないような視線を最後までこちらへと残すようにしてその場を去って行ったのだが、そのさまを訝しく感じつつもそうだと今更のように目の前の書架へと向き直っていた私は、多分それ以上に驚いた顔をして

いたと思う。

だって……、ただの一冊でもある。

私の目の前の棚だけがそう　右も左も周囲の他の書架からはあらかた本が飛び出してしまっていたにもかかわらず、まるで揺れがあったことそれ自体を否定するかのよう、実に整然とした姿を保っていて、そこから落ちてきた本など一つもないのであった。

しかもご丁寧に先程私がその手を放してしまっていたあのギリシヤ語辞典までもがぴったりと棚の奥まで押し込まれてある。最早ただただ呆然と目の前の光景を眺めるしか術がない私であったが、その段になってようやくはつとした。

そうだ　この揺れ。こんなのはこの前の比ではない。

私は慌てて制服のポケットから携帯を取り出すと祖母の携帯へ電話を掛けようとしたのだけれど、正にその機先を制してのことだった。掛ける前に掛かってきていた着信を反射的に私は取る。

「何……、どうしたの？」自分でも微かに声が震えているのが分かった。何しろこのタイミングで、しかも相手は母なのである。

今はまだ会社のはずだったが、何かがあった知らせである可能性も皆無ではなかった。が　しかし、『いや、何ってわけじゃないんだけどさ。大丈夫だった？』どうやら杞憂である。母は特別の理由があつての電話ではない旨告げると私の安否を尋ねてきた。

「うん。大丈夫。周りは……」言つて、周囲の惨状を見渡す。「結構大変な感じだけど、でも別に怪我とかは　」特になし。無論それは今日の前にある書架が私に本の雨を降らせなかったことが多く寄与してのことではあつたけれど、もちろんそんなことをわざわざ言うつもりはなかった。

「それよりも」気掛かりなのは祖母のことである。それについて言い掛けた時、またしても機先は制せられた。『分かてる』みなまで言つなと言の下に撥ねつけられる。

『様子は私が見てくるから。だからあんたは学校にいなさい』

「会社は？」

『大丈夫』そんなことはお前が心配することではないと言われたような気がした。それくらいには強い口調。『家についたら連絡するから』

「うん」最早こちらからは何も言うことがなかった。全てはお見通し。母はいつでも私を私自身よりよく知っているのである。

いつの間にか屋外では雨が、愚図り出したように一斉に降り始めていた。

確かめるならそう 早い方がいいに決まっていた。だのにどうしてだろう。私は授業中でも気もそぞろ、しきりに机の下に隠した携帯を気に掛けていたにもかかわらず、あれから一時間が過ぎ、二時間が過ぎて、最早終わりのHRの最中である今に至るも一向に掛かってこない母からの電話に焦れてこちらからという気になれずにいたのだった。

いや、分かっている。正直なところを言えばむしろ逆であった。

すぐにやってくるだろうと信じ込んでいた連絡が、しかし待てど暮らせどやってこないことで、私はもう気掛かりの限界を越えてしまっていたのだった。だから恐らくはすでに確定してしまっているであろう現実を、しかしそこから目を背けることで不確定なままに留め置こうとしていたのである。けれどももちろんそれは当然の成り行きであった。

いくら遅れようとあの母が約束を違えることなどあり得ようはずもない。

折も折、終礼のあいさつを終えて放課後と相成った正にその時のことである。あたかも授業が終わるのを虎視眈々と見澄ましていたかのような実に嫌なタイミングで携帯が着信を告げていた。

「……はい」

高鳴る鼓動を押さえつつ電話を取る。と、もちろん聞こえてくる

のは母の声。しかしその口調はどこか私の知っている彼女とは別人のもののように思えた。

「落ち着いて聞きなさい」言うが何だかもつすでに止めても差されたかのような心境である。静かに次の言葉を待つ。

「おばあちゃん……家にいなかった。でもすぐご近所のみなさんが手伝ってくれて……探したんだけど」

「うん」じつとりと手のひらは汗で湿っているのに、背筋は凍えるように寒かった。母はひと呼吸の間を置いてから意を決したように言う。

「嫌な予感がしてね。それで慰霊碑の方まで行ってみたの。そしてらおばあちゃん、やつぱりそこにいて……でもね」

そこで力尽きた。らしくもなく苦しげな息を吐いて、母は多分言葉をオブラートに包もうとしたのだろう。けれどそれは上手くはいかず、ただ単に残酷な結論だけを私の耳へと齎す結果になってしまっていた。

「今は病院で……まだ、意識が戻らないの」

どうやら雨は更にその激しさを増したようである。

いつもはきはきとした口調が特徴の母の、しかし今日に限っては実にたどたどしい説明によれば、祖母はどうやら急性肺炎に罹ってしまったものらしい。

元々最近少し風邪気味だったところに雨の中出歩いたのが追い討ちとなったようである。廊下の長椅子に深く腰掛けうな垂れていた私は、先程の母とのやり取りを思い出していた。

「ごめん。すぐに連絡しなくちゃって思ったんだけど……、学校に直接電話してでもって……でも」

「お父さんには？」

「うん。もつさっき連絡した」

「そう」駆け着けた病院の一室で私を待っていた母は、もう何だか急に老け込んでしまったかのようにだった。短いやり取りを終えて傍らのベッドを見やると、そこには何とも痛ましい姿で横たわる祖母の姿がある。

酸素マスクの中で弱い呼吸を繰り返しているそのさまは、何だかやはり私の知らない誰かのようも見えて……、急に涙が滲んできた。けど必死に堪え、唇を噛む。

「私が広場に着いた時にはもうおばあちゃんびしょ濡れで……、それで海の方を指差してね。ずっと……、何度も、何度も、『津波だ』って……、『津波が来る』って、そう叫んで……」

もう今にもその場に崩れ落ちていきそうだった。うつむいた顔にまるで懺悔でもするかのように言った母のその言葉が今も耳に残っている。

うな垂れていた顔を上げて、私は目に見えない敵の姿をその虚空へと睨みつけた。

「あんたはもう帰りなさい……。明日、終業式でしょ？」

半ば命令口調で言う母の言葉に従って病室を出たものの、しかし中々そのまま帰路に就くことができずにいた私はだから、一人廊下に備え付けられていた長椅子に座り込んでしばらく茫然としていたのだけれど、意を決したように立ち上がると、今度こそその場を後にすることにした。

そう、結局はあそこから全てが始まったのである。

降り頻る雨の中、その灰色の建物は深く景色の中へと沈み込んで見えた。

しかし一步中へと足を踏み入れると、外の音はおるか、その存在そのもの、外界それ自体がすっかりと消え去ってしまったようで、恐らくは窓という窓にブラインドが下ろされ、昼間であるにもかか



わらず煌々と館内が電灯の光に照らされているせいなのだろう  
世界はただそこだけ、まるで終末の世にただ一つ残された最後の孤  
塁のようにさえ感じられるのであった。

私は以前来た時よりも更に輪を掛けて森閑と静まり返っている館  
内を、以前とは違う慎重な足取りで奥まで進んで行く。

なぜだろう。確心があったのである。

果たして彼はそこ　書架の森の奥まった最奥、昨日と寸分違わ  
ぬ場所で、同じ姿勢、同じ表情でそこにいた。

私は無言でその対面の椅子へと腰掛けると、その気難しそうなう  
つむき顔を眺める。と、しばらくして彼はあたかも目を落としてい  
る本の一節を朗読するような調子でこう言った。「何か用？」とつ  
さには反応できずに押し黙るものの、あれこれと考えるだけ無駄だ  
と観念した。「昨日……言ったよね」余計なあいさつは割愛して、  
思っているそのままを言葉に乗せる。

「私に取つての問題が一体どこまでなのか……って」

「そう？」空惚けるセリフとは裏腹に、声は肯定のそれだった。

「あれから考えた……。ううん。正確に言うといさつき、ここに  
来るまでの間に必死に考えてみた」

「それで？」結論を急ぐふうでは決してない。期待する様子でも全  
くなくて、実に興味のなさそうに言うけれど、私は怯んだりしない。  
もうそんな余裕はどこかに吹き飛んでしまっていた。だから言う。

決意を籠めて。

「全部だよ……。私の知る全部。私の知り得る世界の全て。私が知  
ろうとするそのこと自体が、多分問題そのもの。世界にとって、或  
いは人間にとつてそもそも問題つてそういうことでしょ？　出来事  
それ自体が問題なんじゃない。それを問題と思うか否かが問題なん  
だと思う」

そこまでひと息に言ってから少しだけ不安になった。果たしてそ  
れが正解なのかどうか、本当のところは確信が持てなかったからだ。  
しかし不意にページを繰る手を止めゆるく拳に固めると、独り言

ちるように彼は言った。「だとしても、君にできることなど何もないよ」

その言葉に一瞬で頭に血が上る。

「だって言ったじゃない君。世界はもう私の手の中だって」

「だから？」

「そのために見せたんじゃないの？ 私に　「真実の世界をと、そう言い掛けて口を嚙んだ。どうやら私は自分でもそうと気づかぬ内に彼の言葉を信じてしまっていたらしい。そのことに改めて気づかされ、私はもう自分自身をどのように取り繕っていいのか分からなくなってしまうていた。」

「ここまで巻き込んでおいて今更……ひどいよ」

「巻き込む？」

だからだろうか。ついつい口からこぼれ出る恨み節。それに思いの外強い反応を示した彼はようやく視線をこちらへと向けていた。

「だってそうでしょう？ あんな変なものを見えるようにさせられただけじゃなくて、妙な力まで　」

「その力が何か君の不利益になるような悪さをした？」

「え？」予想外の反論に頭が真っ白になる。だって……、昨日のあれからこの方、今まででは考えられないようなことの連続だったのである。なのにと私はその理不尽な物言いに反感を覚えるものの、いやとすぐさま心の中で首を振った。

「君が得たその力は別に君を不幸にするものではないよ？ そればかりか降り掛かる不幸を払いのけるのにちょうどいいくらいだ」

確かに思い返してみれば言う通りである。今朝のあの状況と図書館での光景が目にまなかに浮かぶ。私は絶体絶命の危機から九死に一生を得てまでいた。

「あの宙を泳ぐ魚　『転生魚』、アニマはね。人の憎悪や妬み、恐怖といった不の感情を内部に取り込んで消し去ってしまえる……いわば悪意の浄化装置のようなものなんだ。だからあれの群がっている人間を避けるだけでも大分トラブルを回避することができは

ずだよ。もしかしたらすでにいくらか心当たりがあるんじゃないのかい？」

言われてもう押し黙るしかなかった。心当たりも何も、恐らくは私自身がその避けるべき誰かとなってしまうていたのである。

「加えて君はもうほとんど万能とも言える能力まで得ている。それだけのものがあれば君が守りたいと思っているものくらいは簡単に守り通すことができるはずさ。あとは勝手にやればいい。君は君の問題を、僕は僕の問題をどうにかすればいいだけだ」

だからと彼は、まるで聞き分けのない子供を追い払うかのようにそこで言葉を区切った。けれど……、「違う」私は今度は実際に首を横に振ってみせる。

だってこの子の言っていることはやっていることと全然違うのだ。「君はあの時、あんなにも悔しそうだったじゃない。必死な顔で……ずっと叫んでたでしょう？　なのに私のためにこんな力をくれただなんて……そんなの嘘だよ」

反論はしなかった。けれどももちろん肯定も　それはする必要すらないとも言わんばかりに彼は押し黙ったままだ。だから私は一人勝手に話を続けることにした。

「今日……、またおばあちゃんが倒れたの。あの場所で……慰霊碑広場で、多分あの時の君と同じようにだったと思う。海の方を指差しながら、『津波が来る』って、そう叫びながら。だからもしかしたら君の言っていた『名前』っていうのはそのことじゃないかと思ってる」

自分でももう何を言っているのかよく分からなくなってきてしまっていた。まるで神様に許しても乞うかのように顔をうつむけつても続ける。

「ずっと分からなかった。同じ家に住んで、同じ毎日を生きてたはずなのに、でも見えている世界が違ってた。だから　うつん、違う。ほんとは多分分かるうとなんてしてなかったんだと思う。でも分かりたいの……、今度こそ」

今ならそう、心の底から願えると思った。

「もしもおばあちゃんを苦しめているものをあなたが知っているのなら、教えて欲しい」

「それで君はどうするの？」

まるで決闘でも申し込んでくるかのような厳しい表情だった。挑むように言う彼に深く深呼吸。一拍の間をおいてから……、「私がそれを、倒しに行く」

微かに耳に降る雨音を吹き払うかのように、私は勢いよく答えていた。

「君は『禁断の惑星』という映画を知っているかい？」

慰霊碑へと向かうシャトルバスの中で、彼は唐突にそんなことを聞いてきた。

「さあ……、ちょっと分からないけど」首を捻りつつも反問する。

「有名な映画？」

時折揺れる車内にはもちろんこんな雨の日である。乗客は私と彼の二人だけだった。

「有名か……と言われれば少し返答に困るけどね。二十世紀半ばのアメリカ映画で後世になってからの方が評価が高いSFの名作なんだけれど……それに『イドの怪物』というものが出てくる」

「イド？」初めは？井戸？かとも思っただけけどどうやら違うようである。

「心理学用語さ。彼<sup>か</sup>の有名な精神分析の創始者、ジークムント・フロントが言うところの人の持つ動物的な感情側面 本能の源泉たる無意識領域。エスとも言う。その具現化技術によって作り出されたとされるのがその『イドの怪物』。有り体に言えば人の悪意の実体化だ」そこまでひと息に言ってからひと呼吸置くと、彼は不意に話題を転じた。

「今から一ヶ月程前、南米で巨大地震が発生した。これは知ってるね」

「うん」確かナコが言っていたものである。それから私も気になって少し調べてもいた。

「津波が来るかもって話があったみたい。けど実際には大丈夫で……」

「別のモノがやってきた」一瞬何のことか分からず呆然とする。が、  
「別の……モノ？」

オウム返しに聞くと更なる転調である。

「僕たちの住むこの日本には古来、『ヨリガミ信仰』という観念がある。寄り来る神。寄り来る神。そのような自分たちの住む場所とは別の世界を『他界』と称して特別視し、そこから威力ある何者かが現れるという信仰は確かに日本ばかりではなく海外にも広く認められるものではあるのだけれど、海洋国家だからね、日本は。特別『海』、或いは『海の向こう側』という世界に対しての他界観が発達したわけだ。けれど残念ながらこと日本に限って言えばそれはただの想像力の産物には留まらず、つまり、本当にやって来るんだよ。日本には」

「来るって……、何が？」何となく予想もつきつつも問うと、案の定の答えである。

「『イドの怪物』 人々の怨嗟の結晶。憎悪の具象化。『レーテの魚』 つまりアニメによって浄化し切れずに凝り固まった魂魄の二極の対 魄の集合体であり、女性性に孕まれる男性性。再生の過程が示す破壊への予兆であり、万物に宿る陰の気 アニムス……。遠い異国の人々の苦しみが生み出した人類の敵さ。遙か大海原を越えて、自分たちの苦しみを理解してくれるかもしれない人々 つまり十六年前の震災の被害者たちの元を訪れた。今やこの地に再びの災いを呼び起こそうとしているもの」

「一体何なの、それ？」

「あれに名前などない。いや、名前はこれから見つけなければなら

ない。今のあれは言うなればそう……、ただの悪意の寄せ集め、群勢レギ」

「レギオン……」

それはなぜだかひどく寂しげな響きのする言葉だと思った。

バスを降りると雨はもう小降りで、傘を差す必要もなくなっていた。

私と彼はそこからほんのちょっとだけ、五十メートル程を歩くと、始まりのあの場所　彼と私が初めて出会った場所、慰霊碑広場へとたどり着いていた。

「それじゃあいにくよ？」

「うん……」答えるものの、「でもどうして？」納得できるかと言われれば然に非ず。どこか不貞腐れたように言う。

「私はそのテオーリアとかいうのに目覚めたんじゃないの？  
なのはどうして……」

「見えないのか」

「うん」

彼の話によればやはりその「イドの怪物」　レギオンは、この慰霊碑広場の真上辺りにいるのだそうだ。けれどその姿は私の目には映っておらず、なお且つあのアニメと呼ばれる浮遊生物たちも先程から周囲に見当たらなかった。

でも、「そこにいるんでしょう？」確かにいるはずなのである。その宙空を見つめながら言う。「なのになんで……」

「それは君という人間がまだ人の悪意というものをよく知らないからだよ」

「まさか」冗談ではないと大仰に驚いてみせる。「私はそんな純粋な人間じゃないよ？」

「自分の中にないものを理解できる人間なんていないさ。みな誰し

も失ってから気づく。けど君は今それをいきなり目の当たりにしようとしているんだ。それでも本当に――

「構わない」みなまで言わず大きくうなずくと、何だか彼は複雑そうな顔をした。けれどすぐに諦めたようにため息を吐くと、改めて確認の言葉を投げ掛けてくる。

「怖くはない？」

「うん」

「後悔は？」

「ううん」

「準備は？」

「いつでも」

覚悟を決めて宙を睨む。と、彼の手が目の前へと翳されていた。

「目を閉じて、頭の中を空っぽに」言われた通りに軽く瞳を閉じると、目蓋のその向こうで指先が更に近づくのを感じた。そしてそのまま成り行きに身を委ねていると、耳に響く、囁くような声。

「盲目の求道者……、君のその盲目たる所以<sup>ゆえん</sup>を今ここで解<sup>と</sup>く」それはきつと魔法の言葉であつたに違いない。

まるで催眠術にでも掛かったかのようにリラックスした気分になつていた私の額を、あの時と同じ 図書館で意識を失つた際にそうであつたのと同じように唐突に彼の指先が触れると、次の瞬間、私の中に何かが生まれた。けれど今度はそこで意識を途絶えさせたりはしない。私は初めゆつくりと、しかし次いで決然と、意を決したように目蓋を押し上げ目の前の上空 あの日彼が指で指し示していた場所。或いは倒れる直前の祖母もがそうであつたやもしれない 見定めていたであろう慰霊碑の直上へと鋭い視線を放ち、そして……、

「どうだい？ 初めて見る人間の絶望の姿は」

「うん」思わず眉を顰<sup>しか</sup>めていた。けれど決して視線を逸らすことはない。

「まるで化け物みたい」

「そうだ」力強く答える彼の言葉に更に目を見開いて見る。「あれが僕たちの敵だ」

その瞬間、ああと私は何だか分かったような気がした。

にわかに曇天が裂けて、そこから目映ゆい、神々しい光の筋が幾筋も水な面へと落ちていた。それをまるで後光のように背負いつつ、それはぴたりと宙に浮いている。

体は　ひと言で言えば球体をしていた。

多分大人が両手を広げて取り囲んだとしてもその数は十人は下らないだろうと思えた　胴体はあの浮遊生物たち　アニマたちとは違ってしつかりと色がついており、決して向こう側が透けたりはしていない。そこからまるで球根のように何本もの垂れ下がる脚のようなものが生えていて、左右からも少しだけ同じようなものが出ていた。それは或いは腕のようなものとして機能するのかもしれない。かかったが、もしかしたら脚と見えているものも同様の機能を果たすべく備わっているものであったかもしれない。そして何より異様なのはその口だった。

まるで胴体そのものを人の顔にでも見立てたかのよう。その中央には大きく横に裂けた亀裂があつて、奥には何か牙のようなものすら窺えるのである。

正にそれは化け物としかいいようがない姿形をしていて……多分そう、私はいくらかの確信を持つて思う。見えないものを見るということは即ち自分の中にそれを受け入れるということなのである。

「気をつける」その姿に思わず目を奪われていた私に彼が囁くように言った。

「余り深く見過ぎると取り込まれるぞ。あれは自分を知覚しないものには頓着しないが見られていると悟ったが最後、こちらが気を抜いた瞬間にいつでも襲い掛かってくる」

なんとも恐ろしいことを平然と言うが、しかし、恐らくはもう手遅れだった。にわかに返事のないことを訝ったのだろう。それはやや出し抜けの、多分かなりの声量で叫ばれた呼び掛けであつたに違



いない。

「おい　「緊迫した調子の声が轟くけれど、それは私の耳にはひどく遠い、どこか違う世界から聞こえてくるもののようにしか響かなくて……意識はもう、その中だった。」

すでに十二分に見開かれていた瞳を更に大きく見開いて、私は見る。その映像　いや、記憶だろうか。

見たこともない風景の中を逃げ惑う人々の姿がまるで走馬灯のように頭の中を瞬時に埋め尽くしてしまっていて、叫び、嘆き、憎悪する　彼らの怨嗟にすでにもう私は現実の外<sup>せかい</sup>界へと開く感覚を全て封じられてしまっていた。

だからその時辛うじて彼の声が聞こえた時も、しかし体は全くといっていい程反応してはくれなかったのである。

「馬鹿野郎！」

横合いから、私とその化け物　レギオンの間に割って入るようにして彼が飛び出してくる。や否や、目の前には信じられないような光景が展開されていた。

「くそっ！」

先程まではただ体の下に垂れ下がっているだけだったその根のような、脚のようなものが、まるで一つ一つが意思を持った生き物でもあるかのような動きで私たちの元へと襲い掛かってきていたのである。それを彼は差し向けた右手の先で　多分あの力、アポロギアを使っただろう。宙空で次々に弾き飛ばしていた。

「今日のところはここまでだ。逃げるぞ！」

そしてようやく意識のはっきりとし始めた私に向かい予想外のことを言う。でも……、

「何で!?」折角ここまで来たのだ。もちろんそれは私の方から言い出したことではあったけれど、彼だってそのつもりだったはずである。

「私たちはあれを倒すためにここまで来たんじゃないの?」なのにどうして……訝る私の問い掛けに彼は言葉ではなく実演<sup>じつえん</sup>を以て答え

を示した。

「見てろ」ひと言告げるなり、目の前に差し出していた右手にもう一方の手を添える　と、空中で伯仲していたように見えた彼の力と向こうの攻勢のバランスが崩れ始める。と思いきや、それは一瞬の出来事である。

まるで見えない刃物に切り刻まれてもしたかのように。襲い来る球根の根が手前から順に細切れに切り刻まれていって、それは根だけに留まらない　球根のその本体までもが粉微塵になってしまっていたのだった。最早その姿は半分程がぼろぼろに崩れ落ちてしまつて見る影もない。と、言うのである。「やったの？」

「まだだ　」

弛緩しかけた私の意識を再び引き締めるように彼が叫ぶ。と、「何……？」思わず驚愕の声を上げる私の目の前で、それはあたかも生物の授業の時間に見せられた細胞分裂の早回し映像のようである。ぶくぶくと切り刻まれた断面が泡のように膨張していったと思いきや……、「嘘……」

「再生する」目の前には最早悪夢としか言い様のない光景が展開されていった。

「これくらいではあれは倒せない。なぜならあれも使うからだ。僕たちと同じ力　アポロギアを」

「じゃあどうすればいいの？」

「もちろんあれのアイデアを見出だすより他ない」

そこでようやく彼の言葉の真意を悟る。どうして彼が今まで執拗にそのものの名前にこだわり続けていたのか。どうして一人図書館でこの町の昔のことを調べていたのか。全てはそこに繋がっていたのである。

「なら……、問題はないよ」けれども私は急に冷静になって彼にそう告げた。

「何？」

「アポロギア……、あの力を直接あれに　レギオンに使えばいい

んでしょ？」

ならと、私は私を庇うように目の前に立ち塞がってくれていた彼を押し退けるようにして前へと出る。「おい！」

「大丈夫だよ」

言って目を閉じる。その間際に見えた化け物の姿は最早あらかた再生し切ってしまったように思えた。けれども恐怖はない。その代わりに感じるのはそう……目蓋の裏に浮かぶ、あのぬくもり。寝た切りに近い生活になってから少し経った或る日、私が体を拭いて上げていた時に祖母は突然そんなようなことを言った。

「本能っていうのはきつと、頭の中にはないわね……。あれは多分この辺り」トントンと、胸の奥の方を叩くようにして示す。「体の中心の辺りにあるものなんだと思う」

そう言って力なく笑った彼女は、何だかとても安らかな表情をしていた。

「分かっているのよ？ もうここはあの日までとは違う、決して地続きにある日常ではないんだってことは。でもどうしても思えてしまふのよ。あの日のあれは何かがほんの少し違ってしまっただけで、今からでも遅くはない。何かをほんの少し繋げ直すだけでまたあの日常はすぐにも戻ってくるんじゃないかって……そんなふうにどうしても思えてならないの」でもと、急に寂しげな表情になると祖母は、分かっていると、自分自身に言い聞かせるように、最後にぼそりとつぶやくように言った。

「あれはそう」

その言葉が今ようやく意味へと行き合ったような気がしていた。

「知っている。あなたの名前。それは……」

目を開き、見定める。その先でただその口のみ 怨嗟を叫ぶに必要な器官<sup>もの</sup>だけを備えて生まれた化け物が再びその根を私の元へと放っていた。けれどももう遅い。

私は迫り来る憎悪に優しく触れるように手を差し伸べると、ひと言 囁くように、

「理不尽な終わり……」

そのものを生み出した所以<sup>ゆえん</sup>をつぶやく。と、私の手に触れるや否やそれら根は崩れ、こぼれ落ちて　そして、まるで赤ん坊の泣き声のような音色だった。

醜く歪んだ大きな口が、胸を締め付けるような悲痛な断末魔の声を上げていた。

全てが終わり、別れ際のことである。

「君は一体何者なの？」私はずっと気になっていたことを彼に聞いてみたのだけれど、その返答は予想していたよりも更に難解なものだった。

「僕は君さ……。君と同じ、ただの人間だ。ただ……」

「ただ？」

「多分生まれた時からずっとそう……。遠く、世界の果てのような場所からいつでも声が聞こえていた。助けて……。助けて。ずっと　もちろん今だってそうだ。だから」自嘲するように彼は鼻に掛かったため息をひとつ吐くと、最後にこう言った。

「僕は救うことでしか救われない生き物なんだ」

そして背中を向けてそのまま、さよならとさえ言わなかった。彼は私の元から去って行って、だからってつきり私はもうそれきりだろうと考えていたのである。

なのに……。澄一美香。今日これからどっか行くでしょ？」

「あ、ごめん。私今日これから病院」

「あ、そっか」ペロりと舌を出して、失言だったと詫びるそれはジエスチャーだろうか。ナコは昇降口から校門へと向かう途次、いつものお約束の言葉を掛けてきていたのだけれど、当然ながら今年は私はパスである。

「でも終業式終わった早々じゃなきゃ別に時間あるし、私」

「おばあさん、来週退院だっけ？」

「うん」それまでは何というか……もちろん家に戻ってきてからでも何の問題もないのだけれど、今の内にたくさん話を聞いておきたかったのである。

私は明日からも毎日のように病院へと押し掛けるつもりであった。

「まあいいや。それなら今日は七海と二人でも」

「あ、ごめん。私も……」

「って、ええ？」

何やら土壇場でもう一人にも裏切られてしまったようである。最早八つ当たり同然の物言いであって掛かっているが、それをどこか他人事のように聞きつつ私は一人さつさと先へと歩を進めていた。なぜだろう。何だか妙に晴れやかな気分なのである。足取りはいつもよりも数倍軽く感じられて、今ならば羽ばたいてどこまででもゆけそうな気さえする。けれど……、「わっ、何？」

目の端をゆき過ぎた人影に思わず足を止める。その背中に盛大にナコが激突した。

「澄美香？」七美の方も怪訝そうな声を掛けてくるのだけれど、しかし私はすぐには答えられずにいて　まるで油の切れたロボットのように。ぎぎぎと機械の擦れる音こすでも聞こえてきそうな鈍い動作で私は振り返る。と、視線の先に彼　そう言えば未だ名前さえ知らぬままであった。あの少年　昨日のあの戦友が、何ゆえにかうちの制服を着込んでそこには立っていて……、「やあ、こんにちは」今気づいたとばかりに振り向きざまの横顔にあいさつをしてくる。

「え、何？　誰？」

「ちよっと……澄美香？　どうしたの？」

最早思考停止は免れず、二人の追求にも答えてやれる余裕はない。今はそう　思えば春も半ば、桜もやがて満開の季節なのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9372v/>

---

終末のアポロギア

2011年8月19日20時06分発行